

ムのようにつながって、風、くじら、あり、ヤジルシ、電車、コスモスと、ポチブルとのやりとりが描かれま  
す。こちらはユーモアに加えてペースをも感じさせま  
すが、こうした上質な笑いのセンスというのは、日本の  
子どもの本の中では得がたいものです。

さらにストーリー性がはつきりしているのが、クマの  
くまざわくと犬のいぬうえくんの友情を描いた『いぬ  
うえくんがやってきた』（あかね書房、一九九六）に始  
まるシリーズ。低学年の読者の場合は、むしろこちらの  
ほうから読んでいくほうが、きたやまワールドにスムー  
ズに入っていけるかもしれません。

さて、ここまで紹介したように、きたやまさんの作品  
には、個性豊かな犬たちが登場してきます。犬を飼い始  
めた時、犬を育てるため一年間の「犬育て休業」を取っ  
たというエピソードは有名。ある席で一緒に折に聞  
いてみたところ、ものごころがついた時から、犬とは  
友だちだった由。今も三匹の犬たちと一緒に生活という

ことで、「全部拾ったのよ」という言葉が印象的でした。  
実は犬たちもきたやまさんの本を読んで、向こうからや  
ってきたのかもしれませんが。

きたやまさんは、プロフィールにあるように文化学院  
のご出身です。自由でユニークな教育で知られるこの学  
校の卒業生としては、神沢利子さんや、児童文学研究者  
の上笙一郎さんなどが先輩になりますが、二〇一八年に  
閉校となったのは残念。

そのきたやまさん、「絵本作家という仕事」（講談社、  
二〇一二）掲載のインタビューによれば、お母さんは娘  
を宝塚に入れようと、日本舞踊を習わせたりしたそう  
です。そう言われれば、そんな華やかな雰囲気も持ち  
ますが、絵本作家・画家の組織である日本児童出版美術家  
連盟の理事長を二回務めるなど、書き手の権利を守るた  
めに活動する「闘士」としての顔もお持ちです。そんな  
アンビバレントな個性が、作品世界の持ち味を支えてい  
るのかもしれませんが。

## 木村裕一 (きむらゆういち)



あらしのよるに  
(あべ弘士 絵・講談社)

一九四八年、東京都生まれ。多摩美術大学卒業後、造形  
教室やテレビ幼児番組の仕事などを経て、絵本、童話を  
書き始める。代表作『あらしのよるに』（あべ弘士・絵  
講談社、一九九四）はシリーズ化されるとともに、アニ  
メ映画化され、話題を呼んだが、劇化、ミュージカル化、  
さらに歌舞伎としても上演された。『きむらゆういち  
くり方』（講談社現代新書、二〇〇四）『きむらゆういち  
式・絵本の読み方』（宝島社、二〇〇四）『あらしのよる  
に 恋愛論』（講談社、二〇〇五）などの著書もある。

木村裕一さんの名前をご存じなくとも、「あらしのよ  
るに」と聞けば、思い出される方も多いと思います。嵐  
の夜に、偶然同じ小屋に避難した二ひきの動物。先にい  
たのはヤギで、後から入ってきたのはオオカミ。真っ暗  
で相手の姿は見え、風邪をひいているヤギには臭いが  
分かりません。足を痛めたオオカミが杖をついてきたの  
で、ヤギのほうはそれがひづめの音だと思い、お互いに  
相手のことを同類だと錯覚します（メイとガブという名  
前は、3巻目で初めて出てきます）。それを観ているほ

うは状況がわかっていのに、肝心の当事者はまったく  
気がついてないというシチュエーションは、ドラマ作り  
の手法のひとつですが、それがこの本ではあべ弘士の黒  
を基調とした線画風のタッチの絵とあいまって、最高の  
効果をあげています。僕は大学の創作の授業で、「状況  
設定」ということについて考える教材として、この作品  
とアンジャッシュのコント（例えば「アルバイトの面接」  
を紹介していました。二人の台詞のすれ違いのおかしさ  
という点では同じパターンですが、そこからくるドキド